留学報告書

山下　藍

私は本奨学金を受給し、2022 年 9 月から 2023 年 8 月までの 1 年間国立成功大学華語中心に留学しました。留学前から独学で中国語を勉強し、単語の意味など多少理解していたものの、実際には声調を習得しておらず会話ができない状態であったこと、また当時はコロナ禍で、台湾到着後 7 日間の隔離生活が必要であり、不安を抱えたまま台湾へ出発したのを覚えています。

台湾の友人の協力により、住居探しや携帯電話の契約は問題なくできたものの、現地の方の言葉が聞き取れず、当初はひとりでコンビニに行くことすら億劫でした。

【成功大學華語中心の授業・課題・自己の語学力について】

成功大学華語中心では初級クラスの時から同級生と会話し録音する課題や、街に出て飲料や食べ物を注文し、その様子をビデオに撮る課題などがあり、課題を通して現地の方と話す機会が得られ、また同級生との仲も深まりました。

一週間に一度、学んだ文法や単語を使いテーマに沿って文章をつくり、クラスメートの前で発表する課題もありました。

奨学金を受けている立場であることから、前回が 700 字程度の文章を作成したのであれば、今回は 800 字の文章を、と常に自分へのハードルを上げることを意識して課題に取り組みました。二学期目までは時間に追われプレッシャーを感じながら準備をしていましたが、三学期目ごろになると起稿も苦でなくなり、堂々と発表できるようになりました。また最終学期には、あらかじめ準備をしていなくても、何枚かの与えられた写真からストーリーをその場で考えて紹介できるようになりました。

文章を自分で考えることで、新しい文法や単語が身に付き、また録音をしながら練習を繰り返すことで語彙力や発音が鍛えられました。毎週発表を準備するのは大変でしたが、全体的な華語力を伸ばすのに必要な課題だったと思います。

自己の華語力を伸ばすために自分でした取り組みとして、毎学期教科書を早めに買い、学期間の長期休暇を使って予習をしました。

また話す機会を増やすため、一人の時間も確保しつつ、同級生とできるだけ長く時間を共にするように意識しました。日本人同級生だけが集まるような場面でも、華語を使って会話しました。私は学部留学ではなく、大学付属の華語中心への留学であったことから、台湾学生と交流する機会はそれほど多くなかったものの、同級生と毎日一緒に食事しながら会話するだけでも、華語の上達において大きな助けになりました。

成功大學華語中心は生徒数が多いため、おそらく先生方にとっても膨大な量だったと思いますが、毎日丁寧に課題を添削してくださり、授業のためにパワーポイントをたくさん

準備して文法や単語をわかりやすく解説してくださったため、当初は声調さえ理解できていなかった自分でも、最終的に華語文能力測検 B3(進階級)を取得することができました。
今後も高階級取得を目指し、継続して学習を続けてまいります。

【成功大學の学習環境】

成功大学華語中心はアジアだけでなく、ヨーロッパ、アフリカや中南米など世界各国から学生が集まる学校で、中には台湾まで飛行機で二日かけて来た学生もいました。英語が得意でない私は、留学当初は、外国人の同級生とコミュニケーションをとることすら難しかったですが、中国語の習得とともに彼らとお互いの国について語ることができるようになり、授業の中でも深い話題について討論できるようになりました。また授業間の休み時間に華語を用いて簡単な日本語を外国人学生に教えることができるようになりました。
ほとんどの同級生が 6 歳ほど年下であったため、留学当初は若い学生の輪に加わっていてよいのかと考えてしまうこともありましたが、「年齢は関係ない」という優しい同級生に囲まれ、彼らと一緒に学生生活を楽しむことができました。
学校が開催するイベントには積極的に参加しました。歌唱大会にクラスメート全員で参加し『学猫叫』という曲の振り付けと歌詞を覚え、大勢の生徒の前で披露しました。空き時間を利用した練習を含め、放課後クラスメートと猫のカチューシャを買いに行ったり、猫のメイクを考えたりと本番に向けて取り組んだ思い出こそが私にとって大切な宝物になりました。またクラスメートの誕生日の際にはサプライズで祝いあうなどクラスの雰囲気はとてもよかったです。
学校では毎学期日帰り旅行があり、学校がリムジンバスを手配くださったため、個人では行きづらいような市内から離れたお寺や原住民文化施設を訪れることができました。
また個人でも長期休暇を利用して友人と嘉義、高雄、雲林、台中、南投、宜蘭など多くの都市を訪れ、その地その地の特色を肌で感じることができました。
私は歴史情緒溢れる台南に留学していたため、建物など日本統治時代の名残を校舎の中を含め、至るところに感じました。また成功大学校内は大変自然豊かで、大きなガジュマルの樹は観光地としても有名なスポットとなっており、鴨や亀、リスなども棲息していて校内の景色を見ているだけでも心が癒されました。

【異文化への理解】

留学以前、自分は異文化理解ができていると思い込んでいました。実際には自分の考え方、人間関係における他者への接し方などがあまりに日本的であることに留学を通して、様々な国の学生と交流する中で気づきました。異文化を頭で理解することは容易くできても、実際にそれを受け入れることは難しいものだということも思い知りました。しかし日

本の当たり前と世界の常識が異なることを実感できたことで視野が広がったように思います。

何度か現地の方の家にホームステイをさせてもらう機会があり、台湾と日本の違いについてもよく考えました。台湾人の友人が「台湾人は心と口がつながっている」と言っていて、思ったことを直接的に表現する文化だと感じました。日本は思ったことを遠回しに表現するなど、言葉を濁す文化があります。私は直接的な表現に慣れておらず、現地の方が発した言葉が時には心に刺さることもありましたが、多くの現地の方が、私が困っているときに声をかけてきてくださったり、問題があったときには最後まで一緒に対処してくれたりと行動そのものがとても温かい国民性だと感じました。

特に記憶に残っていることとして、台湾はゴミの捨て方が独特ですが、私がゴミ収集車を逃がしてしまったとき、見ず知らずのバイクに乗った女性が私のゴミを持ってバイクでゴミ収集車を追いかけてくださったことです。あまりの親切さに驚きました。

また、台湾のテイクアウト文化、環境保護への取り組み方、少子化の影響によるペット飼育率の増加、健康志向の高まりによる素食への関心の高まりなど実際に台湾を訪れたことで台湾の今を目で見て知ることができました。

【これからについて】

留学前私は航空会社に 4 年半勤務していました。当時はコロナウイルスの影響を受け便の欠航が相次いでいましたが、コロナ禍で急減したインバウンド観光客も今は回復傾向にあります。今後は学んだ華語と以前の職務経験を活かしたいという気持ちから台湾の航空業界で再就職を目指す予定です。

【さいごに】

帰国してみれば、一年の留学生活はとても短かったです。天候や食事に慣れるまでに時間がかかり、毎学期訪れる同級生との離別など辛いと感じたこともあった留学生活でしたが、振り返ってみればどんな時も自分の傍には親切な現地の方、優しく見守ってくださった先生方や学校のオフィスの方、優しい同級生、友人がいました。また留学を終える頃には生活にも慣れ、Uバイク（レンタサイクル）を使いこなしていましたし、台風による大雨で全身びしょびしょになって登校したことも今となっては懐かしい思い出です。台南で過ごした何気ない毎日がとても恵まれていたものだと実感しています。

奨学金を一年にわたり賜りましたこと、心より感謝申し上げます。奨学金をいただきながら留学できたことで、金銭面での不安が解消され、勉学に集中して励むことができました。

また国境を越えて様々な国の友人に出会い、忘れることのできない充実した留学生活を送ることができました。この大変貴重な機会を与えてくださった関係者の皆様に重ねて深

く感謝申し上げます。ありがとうございました。

台湾桃園空港到着直後

カフェ店員さんの優しいおもてなし（台南）

台南の日常

奇美博物館（台南）

発表の様子

宜蘭での葱油餅作り

日月潭